

小学校における「大学生による学校支援ボランティア」 の効果的活用に関する研究

A Study on Effective Use of University student school volunteers in Elementary Schools

酒井 研作・溝部ちづ子・石井 眞治・斉藤 正信

財津 伸子・道法亜梨沙・谷川 宮次

Kensaku SAKAI, Chizuko MIZOBE, Sinji ISHII, Masanobu SAITO

Nobuko ZAITSU, Arisa DOHO and Miyaji TANIGAWA

The aim of this research is to study the effective use of actually university student school volunteers in elementary schools through the survey of teachers who actually use school volunteers. Data was gathered through a 15-item questionnaire from 41 subjects.

In this paper, data was analyzed to determine relations between the degree of satisfaction, the effect of school volunteer work and the quality of school volunteers, the actual volunteer activity circumstances of school volunteers.

The findings from this survey are as follows: (1) The degrees of satisfaction with school volunteers is high as a whole. (2) The factors related to teacher satisfaction are related to attitude, for example polite greetings to teachers, and a willingness to volunteer. (3) Preliminary meetings between teachers and school volunteers can enhance the positive effect of school volunteer work.

問 題

本研究の目的は、現在、多くの学校で導入されている「大学生による学校支援ボランティア」の効果的活用方策を検討する一助として、ボランティア学生が実際にいかなる活動を実施し、その結果、教員及び学校教育全体に対していかなる効果をもたらしたのか、実際にボランティア学生を活用した教員に対する意識調査をとおして明らかにすることである。

今日、わが国の教育界では、実践的指導力を備えた優秀な教員を、いかに学校現場に集めるかが喫緊の重要課題となっており、そのため、全国の教員養成系大学・学部には、そのような教員の養成・輩出が強く求められるようになってきている。2012年の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」¹⁾では、教職志望学生の実践力を高め、学校ボランティアや学校支援地域本部、児童館での活動など、教育実習以外での学校現場体験の充実を求めたり、教職志望の学生を対象とした学校現場での長期インターンシップの導入などが提言されている。また、2015年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」²⁾においても、現行の教員養成の課題として「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる

機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要」と指摘し、その具体的改善策として、学校インターンシップの導入が示されている。

一方で、2015年の中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」³⁾では、学校の教職員構造の課題について、「諸外国と比較した我が国の学校の教職員構造は、教員以外のスタッフの配置が少ない状況にあると考えられる」と指摘しており、今後の学校組織の在り方として、多様な専門性をもった人材（SC、SSW等）が学校組織の一員として位置づけられ、「多職種協働の学校（チームとしての学校）」像の必要性が提言されている。同じく、2015年の中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」⁴⁾においても、学校と地域の連携・協働の一層の推進が目指されている。このような政策文書からも明らかなように、今後の学校組織は、従来の教員中心の組織形態から脱し、校長のリーダーシップの下、教員以外の多様な人材を包含しつつ、それらが有機的に統合され教育効果を上げていくことが構想されている。

以上のような政策動向から大学生による学校支援ボランティアを捉え直すと、この取組は、学校現場でボランティア活動を実施する学生の教員としての資質能力の育成のみならず、ボランティア学生が学校教育を構成する一主体として効果的に機能する点も期待されうると考える。

教職課程に在籍する大学生の学校支援ボランティアが、教員養成を巡る実践課題の一つとなる中、多くの実践報告や分析研究が蓄積されてきている。例えば、大分大学教育福祉科学部では、2004年から、大学生が小中学校に行き児童生徒の学習面・心理面での援助や授業・学校行事の補助を行う「まなびんぐサポート」事業を実施している。この事業を対象とした研究では、参加学生に「子ども一人ひとりの立場に立って考える力」「個々の子どもに応じた支援を考える力」などの向上がみられたり（麻生・松本・大岩・藤田・竹中・衛藤，2009）⁵⁾、参加学生に対する大学教員の教育的介入が、学生の活動を促し、記録の記述タイプを変容させる効果があることを示している（森下・麻生・藤田・久間・衛藤・竹中・大岩，2011）⁶⁾。2005年度からインターンシップを導入している佛教大学では、その実施経緯や実施形態、実施による効果等を報告しており、学校現場体験に参加した学生が、活動中に大学で学ぶ理論と学校現場の実践の統合を行っていること、参加することで教員採用試験への意気込みが上昇し、結果的に合格に結実することを明らかにしている（原，2009）⁷⁾。岡山大学の研究では、2015年より必修化した公立学校園での「教育実践インターンシップ」によって、学生の生徒指導力が向上すること、授業における指導経験や特別支援を要する児童への関わりが、学生の教育実践力を向上させることが示されている（住野・三島，2015）⁸⁾。比治山大学でも、実施されている「学校支援ボランティア」について、その実施による効果を継続的に研究しており、ボランティア経験が教職志望動機や大学の授業に対する受講態度にポジティブな影響を与えていることを明らかにし（溝部・石井・古谷・斉藤・財津・山崎，2012）⁹⁾、そのような効果が生起する要因について、ボランティアの活動時間や活動中の困難認知の面から説明している（溝部・石井・斉藤・財津，道法，酒井，杉田，2014）¹⁰⁾。これら一連の研究は、学校現場体験が参加する学生に対して教育的効果のあることを実証するものである。

このように参加学生に対する調査研究が蓄積される一方で、ボランティア学生を受け入れる学校を対象とする研究もいくつか見られる。坂根（2006）¹¹⁾は、香川大学の学生がボランティアとして活動した学校に質問紙調査を行っており、受け入れ学校が学生の活動に満足している状況を示している。また、長谷川（2015）¹²⁾は、ボランティア学生を受け入れている教員を対象に、学生に対するニーズの違いによって学生の活動内容や教員の意識にいかなる変化があるのか明らかにしている。

本研究では、以上の先行研究を踏まえ、「大学生による学校支援ボランティア」の実態を明らかにするとともに、ボランティアの活動状況、参加学生の資質や態度、参加学生に対する指導体制とボラ

ンティアに対する教員満足度の関係を分析する。また、ボランティア学生に対する期待（ニーズ）を基に、学校支援ボランティアの学校における効果を検討する。

方 法

① 調査対象者

本調査は、H市教育委員会が主催する「大学生による学校支援活動」に参加しているH市立小学校の内、平成28年度、比治山大学学生をボランティアとして受け入れている小学校に勤務する教員のうち、当該小学校で実際にボランティア学生を活用している教員37名が回答者となった。

② 調査方法

37名の教員を対象として質問紙調査を実施した。質問紙調査は「小学校における『大学生による学校支援ボランティア』の活用実態に関する調査」と題し、「『大学生による学校支援ボランティア』が、実際に学生を受け入れている学校にとっていかなる効果をもたらしたのか否か、その実態を明らかにすることを目的としています。結果は、学生を受け入れる学校にとっても効果の高いボランティア学生の在り方を検討するための基礎資料とします。」との教示文を付して、留置調査法で実施した。なお、結果の分析には、分析ソフトとしてSPSS（Version22）を用いた。

③ 質問紙の構成

1. 関わったボランティア学生の学年：「1年生」「2年生」「3年生」「4年生」「わからない」で択一回答させた。
2. 関わったボランティア学生の性別：「男性」「女性」で択一回答させた。
3. 関わったボランティア学生の教職志望の有無：「教職志望である」「教職志望ではない」「わからない」で択一回答させた。
4. ボランティア学生の活動の周期性：「定期的に活動を行っている」「活動は不定期である」で択一回答させた。
5. ボランティア学生の活動頻度：4で「定期的に活動を行っている」と回答した者のみ「月に1～2回程度」「週1回程度」「週2回程度」「週3回程度」で択一回答させた。
6. ボランティア学生の1回の活動時間：4で「定期的に活動を行っている」と回答した者のみ「1時間未満」「1時間以上2時間未満」「2時間以上3時間未満」「3時間以上4時間未満」「4時間以上5時間未満」「5時間以上」で択一回答させた。
7. ボランティア学生の活動開始からの期間：「1ヶ月未満」「1ヶ月以上2ヶ月未満」「2ヶ月以上3ヶ月未満」「3ヶ月以上4ヶ月未満」「4ヶ月以上5ヶ月未満」「5ヶ月以上」で択一回答させた。
8. ボランティア学生の活動内容：「授業時の学習支援（学級全体）」「授業時の学習支援（個別の児童）」「通常学級における特別支援に関わる児童への対応」「特別支援学級における指導補助」「ふれあい教室等の別室登校している児童への対応」「休み時間等における児童の話し相手・遊び相手」「放課後の学習支援」「校外学習の引率・指導補助」「学校行事の補助」「宿題などの丸付け補助」「教材教具の準備」「印刷物の支援」「児童の清掃活動の指導補助」「給食時の指導補助」「花壇等の学校環境の整備」「あいさつ運動の支援」「登下校中の安全指導」「担任不在時の代理」「その他」の選択肢を設定し、ボランティア学生が実施した活動すべてを回答させた。
9. ボランティア学生の資質・態度：回答者が関わったボランティア学生の資質や活動中の態度について評価させるため、「決められた時間を守ろうとする」「教員からの指示を守ろうとする」「校内

のルールを守ろうとする」「自分に任された活動を責任もって遂行しようとする」「教職員や児童に対してきちんと挨拶ができる」「教職員や児童に対して適切な言葉遣いで会話ができる」「状況に応じた適切な身なり・服装で活動できる」「教職員と協力しながら活動できる」「指示された活動を正確にこなすことができる」「指示された以外の活動も積極的に行おうとする」「児童に対して公平に接することができる」「教科内容を正しく理解している」「授業中、簡単な学習指導ができる」「PCや電子黒板などのICTに関する技術がある」の14項目について、それぞれ5段階尺度（そう思わない—そう思う）で回答させた。

10. 教員とボランティア学生の関わり：「活動前の打ち合わせ」「活動中の指示」「活動後の指導助言」の3項目について、それぞれ4段階尺度（行っていない—頻繁に行っている）で回答させた。
11. ボランティア学生に対する教員のニーズ（期待）：「教員の負担の軽減」「授業中の指導の充実」「個別指導が必要な児童への対応の充実」「学級の活性化」「先生ご自身の成長・意識の変化」「児童の学習意欲の向上」「児童にとっての教員以外のコミュニケーション相手」「ボランティア学生の児童理解力の向上」「ボランティア学生の教職に対する意識の向上」「大学・地域と学校の連携促進」の10項目について、それぞれ5段階尺度（期待しない—大いに期待する）で回答させた。
12. ボランティア学生に対する教員の評価：11と同じ10項目を設定し、それぞれ5段階尺度（効果はなかった—大いに効果があった）で回答させた。
13. ボランティア学生受け入れによる弊害：ボランティア学生を受け入れたことによる弊害について、自由記述で回答させた。
14. ボランティア学生に対する満足度：回答者が関わったボランティア学生について、「まったく満足していない」「あまり満足していない」「どちらともいえない」「ある程度満足している」「大いに満足している」で択一回答させた。
15. 回答者属性（年齢・性別・担当学年・職階）

結 果

I 回答者の属性

本調査は、平成28年度、H市教育委員会「大学生による学校支援活動」に参加しボランティア学生を受け入れたH市立小学校12校の教員37名が回答した。回答者の年齢は、20代11名（29.7%）、30代7名（18.9%）、40代5名（13.5%）、50代13名（35.1%）であり（無回答1名）、男性6名（16.2%）、女性30名（81.1%）であった（無回答1名）。回答者の職階は、教諭31名（83.8%）、教頭4名（10.8%）であり、教諭の担当する学年は、第1学年が9名（24.3%）、第2学年が5名（13.5%）、第3学年が4名（10.8%）、第4学年が5名（13.5%）、第5学年が3名（8.1%）、第6学年が2名（5.4%）、特別支援学級が4名（10.8%）であった。また専科を担当する教員も1名（2.7%）いた（無回答4名）。

II ボランティア学生の活動状況

本調査の対象となったボランティア学生は41名である。以下、ボランティア学生の属性及び活動内容に基づいて、ボランティア学生の活動状況を記述する。

1. ボランティア学生の属性

(1) 学年・性別

本調査の回答者となった教員に、自身が活用したボランティア学生の学年について質問した。その結果、2年生が16名（39.0%）、3年生が17名（41.5%）であった。また、学生の学年が不明という回答も6件（14.6%）あった（無回答2件）。また、同様に性別について質問した結果、男子学

生が16名(39.0%), 女子学生が25名(61.0%)であった。

(2) 教職志望の有無

(1)と同様, 回答者の教員に, 自身が活用したボランティア学生が教職を志望しているか否かを質問した。その結果, 41名のボランティア学生の内, 34名(82.9%)が教職志望学生であり, 1名(2.4%)が教職志望ではなかった。また, 残りの6名(14.6%)については「わからない」という回答であった。

(3) ボランティア活動の頻度・時間

調査対象となった41名のボランティア学生の内, 35名(85.4%)が定期的に活動を行っており, これらの学生の活動頻度は, 週1回程度が最も多く35名中33名(94.3%)であった。また, 定期的に活動しているボランティア学生35名の一回当たりの活動時間は, 「1時間未満」が1名(2.9%), 「1時間以上2時間未満」が1名(2.9%), 「2時間以上3時間未満」が11名(31.4%), 「3時間以上4時間未満」が9名(25.7%), 「4時間以上5時間未満」が5名(14.3%), 「5時間以上」が7名(20.0%)であった(無回答1件)。

なお, すべてのボランティア学生41名の活動開始からの期間を尋ねた質問に関しては, 「1ヶ月以上2ヶ月未満」が1名(2.4%), 「2ヶ月以上3ヶ月未満」が12名(29.3%), 「3ヶ月以上4ヶ月未満」が9名(22.0%), 「4ヶ月以上5ヶ月未満」が2名(4.9%), 「5ヶ月以上」が15名(36.6%)であった(無回答2件)。

2. ボランティア学生の活動内容

ボランティア学生の活動内容について明らかにするため, 予想される活動内容19項目を設定し, 該当する項目すべてを回答させた。その結果が図1である。これによると, 「授業中の学習支援(個別の児童)」「授業時の学習支援(学級全体)」「休み時間等における児童の話し相手・遊び相手」といった児童対応に関する項目が高く, 次いで, 「宿題などの丸付け補助」「印刷物の支援」といった教員の補助に関する項目が高いという結果になった。

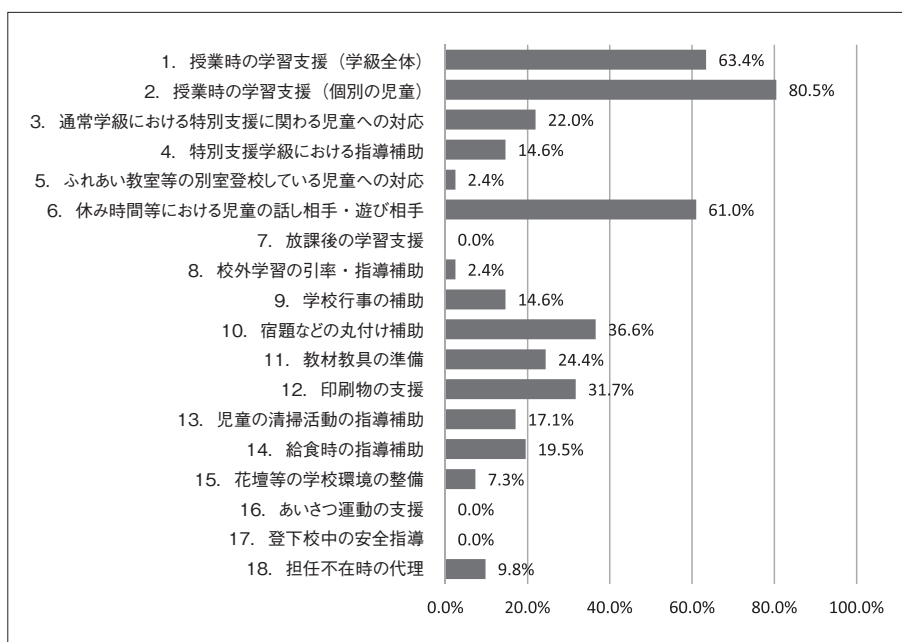


図1 ボランティア学生の活動状況

Ⅲ 学校支援ボランティアの活動状況と教員の満足度の関係

1 ボランティア学生の資質・態度と教員の満足度

(1) ボランティア学生に対する教員満足度

ボランティア学生に対する教員の満足度を尋ねた設問では、「大いに満足している」(36.6%)、「ある程度満足している」(41.5%)、「どちらともいえない」(12.2%)、「あまり満足していない」(2.4%)との結果が得られた(無回答7.3%)。これについて、「おおいに満足している+ある程度満足している」「どちらともいえない」「あまり満足していない+満足していない」との間で χ^2 検定を行ったところ0.1%水準で有意差が見られ、教員が活用したボランティア学生に対して好意的な評価を下していることが分かった。

(2) ボランティア学生の資質・態度

ボランティア学生の資質及び活動中の態度について、設定した14項目に対する評価得点に基づき、14項目独立に平均値と標準偏差を算出したものが表1である。表1から、平均4ポイント以上の評価を得た項目は、「教員からの指示を守ろうとする」「決められた時間を守ろうとする」「校内のルールを守ろうとする」「自分に任された仕事を責任もって遂行しようとする」「教職員や児童に対してきちんと挨拶ができる」「教職員や児童に対して適切な言葉遣いで会話ができる」「状況に応じた適切な身なり・服装で活動できる」「教職員と協力しながら活動できる」「指示された活動を正確にこなすことができる」「児童に対して公平に接することができる」であり、「指示された以外の活動も積極的に行おうとする」「教科内容を正しく理解している」「授業中、簡単な学習指導ができる」「PCや電子黒板などのICTに関する技術がある」は平均値が4ポイント未満であった。

表1 ボランティア学生の資質・態度

	平均値	標準偏差
①決められた時間を守ろうとする	4.78	0.42
②教員からの指示を守ろうとする	4.88	0.33
③校内のルールを守ろうとする	4.78	0.47
④自分に任された活動を責任もって遂行しようとする	4.78	0.42
⑤教職員や児童に対してきちんと挨拶ができる	4.66	0.62
⑥教職員や児童に対して適切な言葉遣いで会話ができる	4.73	0.45
⑦状況に応じた適切な身なり・服装で活動できる	4.68	0.69
⑧教職員と協力しながら活動できる	4.68	0.57
⑨指示された活動を正確にこなすことができる	4.66	0.57
⑩指示された以外の活動も積極的に行おうとする	3.88	1.12
⑪児童に対して公平に接することができる	4.46	0.64
⑫教科内容を正しく理解している	3.80	0.88
⑬授業中、簡単な学習指導ができる	3.80	0.72
⑭PCや電子黒板などのICTに関する技術がある	3.19	0.57

(3) ボランティア学生の資質・態度と教員満足度の関係

① ボランティア学生の資質・態度と教員満足度の相関分析

ボランティア学生の資質・態度得点と教員の満足度得点について、Pearsonの積率相関係数を算出したものが表2である。これによると、教員の満足度と正の相関がみられた項目は、「教員からの指示を守ろうとする」「自分に任された仕事を責任もって遂行しようとする」「教職員や児童に対してきちんと挨拶ができる」「教職員や児童に対して適切な言葉遣いで会話ができる」「状

況に応じた適切な身なり・服装で活動できる」「指示された以外の活動も積極的に行おうとする」「教科内容を正しく理解している」「授業中、簡単な学習指導ができる」であった。

表2 ボランティア学生の資質・態度と教員の満足度の関係

ボランティア学生の資質態度	教員の満足度
	相関係数
①決められた時間を守ろうとする	.31
②教員からの指示を守ろうとする	.43**
③校内のルールを守ろうとする	.12
④自分に任された活動を責任もって遂行しようとする	.40*
⑤教職員や児童に対してきちんと挨拶ができる	.71**
⑥教職員や児童に対して適切な言葉遣いで会話ができる	.63**
⑦状況に応じた適切な身なり・服装で活動できる	.52**
⑧教職員と協力しながら活動できる	.27
⑨指示された活動を正確にこなすことができる	.23
⑩指示された以外の活動も積極的に行おうとする	.57**
⑪児童に対して公平に接することができる	.24
⑫教科内容を正しく理解している	.33*
⑬授業中、簡単な学習指導ができる	.36*
⑭PCや電子黒板などのICTに関する技術がある	.20

** $p < .01$, * $p < .05$ を示す

② ボランティア学生の資質・態度と教員満足度の重回帰分析

上記の項目の教員の満足度に与える影響を探るため、教員の満足度を従属変数、ボランティア学生の資質・態度を独立変数とし、ステップワイズ法に基づき重回帰分析を行った。

重回帰分析の結果、重決定係数は.566であり、0.1%水準で有意な値であった。それぞれの独立変数から従属変数への標準偏回帰係数は表3に示すとおりである。ここから、ボランティア学生に対する教員の満足度に対しては、「教職員や児童に対してきちんと挨拶ができる」「指示された以外の活動も積極的に行おうとする」といった学生の態度が重要な要因になっていた。

表3 重回帰分析結果

	β
教職員や児童に対してきちんと挨拶ができる	.569***
指示された以外の活動も積極的に行おうとする	.277*

*** $p < .001$, * $p < .05$ を示す

2 ボランティア学生の指導体制の程度と教員満足度

(1) ボランティア学生に対する指導体制の程度と教員満足度

ボランティア学生に対する指導体制の程度について尋ねた設問で、設定した3項目に対する平均得点は、「活動前の打合せ」が2.17、「活動中の指示」が2.95、「活動後の指導や助言」が2.41でありボランティア学生に対する教員の指導の程度について、「活動中の指示」はある程度行われているものの、活動前後の関わりは限定的である。

また、ボランティア学生に対する指導体制の程度と教員の満足度について、Pearsonの積率相関係数を算出した。その結果、「活動前の打合せ」と「満足度」との間に低い正の相関関係が確認された ($r=.41, p < .05$)。

(2) ボランティア学生に対する指導体制とボランティア活動の効果

ボランティア学生に対する指導体制の程度とボランティア活動の効果について、Pearsonの積率相関係数を算出したものが表4である。これによると、「活動前の打合せ」は、「教員の負担の軽減」「授業中の指導の充実」「個別指導が必要な児童への対応の充実」「ボランティア学生の児童理解力の向上」「ボランティア学生の教職に対する意識の向上」との間で正の相関関係がみられ、「活動中の指示」は、「授業中の指導の充実」「学級の活性化」「教員自身の成長・意識の変化」「児童の学習意欲の向上」「ボランティア学生の児童理解力の向上」「大学・地域と学校の連携促進」との間で正の相関関係がみられた。なお、「活動後の指導や助言」とは、ボランティア活動の効果に関するいずれの項目とも相関関係がみられなかった。

表4 ボランティア学生に対する指導体制とボランティア活動の効果

ボランティア活動の効果	①活動前の打合わせ ②活動中の指示 ③活動後の指導や助言		
	相関係数		
①教員の負担の軽減	.41**	.27	.16
②授業中の指導の充実	.41**	.33*	.24
③個別指導が必要な児童への対応の充実	.37*	.29	.22
④学級の活性化	.24	.36*	.17
⑤先生ご自身の成長・意識の変化	.06	.40*	.22
⑥児童の学習意欲の向上	.28	.34*	.11
⑦児童にとっての教員以外のコミュニケーション相手	.16	.21	.03
⑧ボランティア学生の児童理解力の向上	.31*	.35*	.24
⑨ボランティア学生の教職に対する意識の向上	.31*	.25	.28
⑩大学・地域と学校の連携促進	.30	.32*	.04

** $p < .01$, * $p < .05$ を示す

IV ボランティア学生の受け入れに対する期待（ニーズ）とその効果

1. ボランティア学生に対する期待（ニーズ）

ボランティア学生の受入に際して、教員がいかなる期待（ニーズ）を持ち、また、受け入れによる効果をいかに認識しているかを探るため、それぞれ共通の10項目を設定し回答を求めた。それぞれの項目について期待と効果の得点の平均値を示したものが図2である。

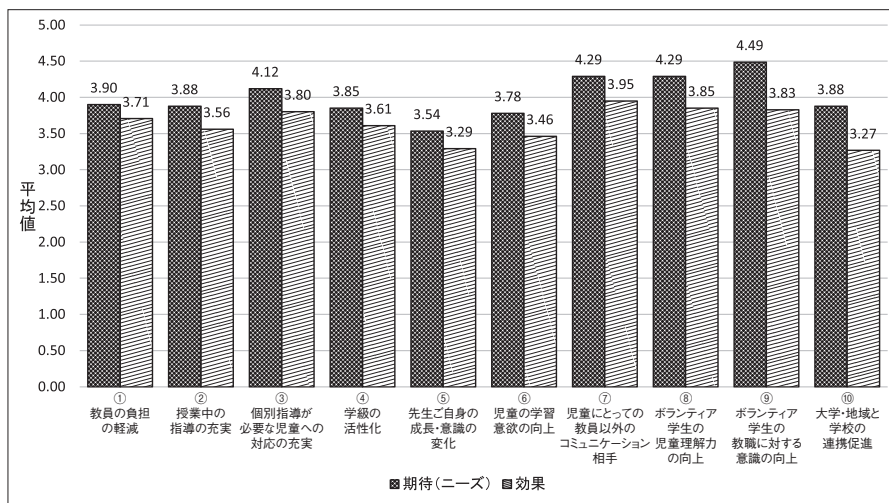


図2 ボランティア学生に対する教員の期待（ニーズ）とその効果

図2を見ると、教員がボランティア学生に期待する項目として、「ボランティア学生の教職に対する意識の向上」「ボランティア学生の児童理解力の向上」「児童にとっての教員以外のコミュニケーション相手」「個別指導が必要な児童への対応」の平均得点は4ポイント以上であり、「教員の負担の軽減」「授業中の指導の充実」「学級の活性化」「先生ご自身の成長・意識の変化」「児童の学習意欲の向上」「大学・地域と学校の連携促進」は4ポイント未満であった。

2. ボランティア学生に対する期待（ニーズ）と効果の差

一方で、ボランティア学生受け入れによる効果の得点平均値は、すべての項目で期待（ニーズ）得点を下回った。この差について t 検定を実施したところ、「授業中の指導の充実」($t=2.57, df=40, p<.05$), 「個別指導が必要な児童への対応の充実」($t=2.11, df=40, p<.05$), 「先生ご自身の成長・意識の変化」($t=2.50, df=40, p<.05$), 「児童の学習意欲の向上」($t=2.69, df=40, p<.05$), 「児童にとっての教員以外のコミュニケーション相手」($t=3.55, df=40, p<.01$), 「ボランティア学生の児童理解力の向上」($t=3.48, df=40, p<.01$), 「ボランティア学生の教職に対する意識の向上」($t=5.79, df=40, p<.001$), 「大学・地域と学校の連携促進」($t=4.69, df=40, p<.001$) で有意差がみられた。

考察

本研究の目的は、「大学生による学校支援ボランティア」について、その活動実態を明らかにし、ボランティア活動に対する教員の満足度とボランティア学生の活動状況や資質・態度との間にいかなる関係があるのか分析することである。

まず、本調査の対象となったボランティア学生は、多くが教職志望の学生である。活動状況は、大学の空き時間を利用するなどして、週1回程度の活動を定期的に継続している学生が多い。活動内容は、「授業時の学習支援（学級全体・個別の児童）」「児童にとっての教員以外のコミュニケーション相手」といった児童と直接かわる内容が多く、次いで、「宿題などの丸付け作業」「印刷物の支援」といった授業外での教員支援が多かった。この結果は、ボランティア学生を対象とした溝部ら（2012）の調査と同様である。

次に、ボランティア学生に対する教員の満足度は、ボランティア活動のいかなる要因と関係するのか分析する。本調査に回答した教員は、自身が活用したボランティア学生について肯定的な評価を下しており、この点は坂根（2006）の調査結果と同様である。本調査では、この満足度を規定する要因を探るべく、ボランティア学生の活動状況（頻度・時間・内容等）、資質や態度、教員からの指導体制、教員の個人属性との相関関係を分析した。その結果、ボランティア学生の資質・態度、教員からの指導体制が、教員の満足度と関係することが判明した。

ボランティア学生の資質・態度について、本調査では、時間や指示を守ろうとする態度、適切な身なりや言葉遣いで活動するといったマナーの面で高い評価を得ている。一方で、指示以外の活動に対する積極性や教科内容に関する知識・理解、ICTの操作を含めた学習指導力の点では評価が下がっている。これらの評価と満足度の関係を分析したところ、「教員からの指示を守ろうとする」「教職員・児童に挨拶ができる」「教職員・児童と適切な言葉遣いで会話できる」「状況に応じた身なり・服装で活動できる」「指示以外の活動も積極的に行う」「教科内容を正しく理解している」「簡単な学習指導ができる」といった項目と正の相関があり、さらに、これらの項目で重回帰分析を実施したところ、「教職員・児童に挨拶ができる」「指示以外の活動も積極的に行う」が強い影響を与えていた。すなわち、ボランティア学生に対する教員の満足度は、「何ができるか」という学生の能力以上に、「いかなる姿勢で臨むか」という態度に左右されている。学校支援ボランティアに関して、小中学校教員を対象に調査研究を行った長谷川（2015）は、教員のボランティア学生に対するニーズを分析する中で「実に9割以上の教員が学生の成長を求めており、学生を戦力として求める割合よりも高いことが分かった」

としており、このような教員の思考傾向が、学生の参加態度を重視するという本調査結果にも表れていると言えよう。

ボランティア学生に対する教員からの指導体制については、長谷川（2015）が指摘しているとおり、活動中の指示が多く活動前後の関わりが少ないことが明らかとなった。この状況が教員の満足度といかなる関係にあるか分析したところ、「活動前の打合せ」との間に正の相関関係がみられた。また、「活動前の打合せ」はボランティアの効果とどのように関係するのか分析したところ、「教員の負担の軽減」「授業中の指導の充実」「ボランティア学生の児童理解力の向上」「ボランティア学生の教職意識の向上」と正の相関関係がみられた。ボランティア学生は大学の授業や課外活動で多忙であり、同様に、受け入れる教員も日々の職務に追われている状況である。「活動前の打合せ」が十分に行われていないという本調査の結果は、このような現実を反映したものであろう。しかし、「活動前の打合せ」を行うことで、受け入れ教員にメリットをもたらすのみならず、学生の成長にもつながるという結果は、今後の「学校支援ボランティア」を検討する上で、いかに両者のコミュニケーションを確保するかといった制度的課題にもなる。

最後に、本調査では、ボランティア学生に対する期待（ニーズ）と受け入れによる効果を同一質問群で調査し、教員はボランティア学生に何を期待し、その結果いかなる効果を得られたのか明らかにした。ボランティア学生への期待については、長谷川（2015）が指摘するとおり、自身の職務負担の軽減よりも、「児童理解力の向上」や「教職意識の向上」といった学生の成長を期待する傾向がみられた。一方で、ボランティア学生に対する期待と得られた効果の得点差を見ると、10項目中8項目（「授業中の指導の充実」「個別指導が必要な児童への対応の充実」「自身の成長・意識の変化」「児童の学習意欲の向上」「児童にとってのコミュニケーション相手」「ボランティア学生の児童理解力の向上」「ボランティア学生の教職意識の向上」「大学・地域と学校の連携促進」）で効果が期待を下回っている。これは、ボランティア学生に対して全体的には満足しているものの、個別の項目でみると改善の余地が大いにあることがうかがえる。この点は、ボランティア学生を送りだす大学側の課題であると同時に、この差がいかなる要因に起因するのか研究上の課題にもなる。

以上、本研究では、「大学生による学校支援ボランティア」の効果的活用を検討する一助として、ボランティア学生に対する教員満足度を、学生の資質・態度、教員による指導体制から検討した。その結果、ボランティア学生の態度が教員の満足度に強く影響を与えるとともに、ボランティア学生に対する事前の打合せの充実が、ボランティアの効果をも高めることも判明した。特に後者は「大学生による学校支援ボランティア」の効果的活用を検討する際、非常に示唆的である。ボランティア学生との事前の打合せとは、すなわち、「教員からボランティア学生へのニーズの伝達」である。森下（2015）¹³⁾が指摘しているとおり、「大学生による学校支援ボランティア」を継続的かつ効果的に運用していくためには、「学校現場のニーズに沿った活動」であることが重要である。ただし、教員とボランティア学生という多忙な2者間では、十分に実施できないであろう。この点については、Murat（2011）¹⁴⁾、瀬戸（2013）¹⁵⁾が指摘するように、校長、教頭、主幹、主任レベルでのボランティア受け入れ体制の整備や校内のボランティア・コーディネーターの充実、あるいは森下（2015）が指摘するように、学校を所管する教育委員会と大学との連携充実も必要となろう。これら、ボランティア学生と教員を取り巻く制度的要因に関する分析は、今後の研究課題としたい。

引用文献

- 1) 文部科学省(2012). 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申).
- 2) 文部科学省(2015). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申).
- 3) 文部科学省(2015). チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申).
- 4) 文部科学省(2015). 新しい時代の教育や地方創生の実現に向けて学校と地域の連携・協働の在

り方と今後の推進方策について（答申）。

- 5) 麻生良太・松本正・大岩幸太郎・藤田敦・竹中真希子・衛藤裕司（2009）. 学校支援ボランティアに参加した大学生の自己省察と体験—大分大学教育福祉学部における「まなびんぐサポート」事業を通して— 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 31(2), 165-177.
- 6) 森下覚・麻生良太・藤田敦・久間清喜・衛藤裕司・竹中真希子・大岩幸太郎（2011）. 学校支援ボランティアの参加学生に対する教育的介入の効果—大分大学教育福祉科学部「まなびんぐサポート」事業を通して— 大分大学高等教育開発センター紀要, 3, 15-27.
- 7) 原清治（2009）. 現場体験活動は教員志望者の実践力を涵養するのか—学校インターンシップのもつ「効果」について考える— 佛教大学総合研究所紀要, 16, 35-51.
- 8) 住野好久・三島知剛（2015）. 教職実践インターンシップが実習生の教育実践力向上に与える影響—岡山大学教育学部生対象アンケート結果にもとづく検討— 岡山大学大学院教育学研究科研究収録, 160, 1-9.
- 9) 溝部ちづ子・石井眞治・古谷嘉一郎・斉藤正信・財津伸子・山崎茜（2012）. 教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の教育的効果に関する研究 比治山大学現代文化学部紀要, 19, 31-44.
- 10) 溝部ちづ子・石井眞治・斉藤正信・財津伸子・道法亜梨沙・酒井研作・杉田郁代（2014）. 教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の教育的効果に関する研究(2) 比治山大学現代文化学部紀要, 21, 31-43.
- 11) 坂根健二（2006）. 学校ボランティア活動の実態と課題 香川大学教育実践総合研究, 13, 15-22.
- 12) 長谷川哲也（2015）. 教員養成における「学校支援ボランティア」の再考—S市小中学校教員への質問紙調査から— 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 23, 113-121.
- 13) 森下覚（2015）. 大学と教育委員会による学校インターンシップの構築と変遷 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 37(2), 287-300.
- 14) C. Murat（2011）. 小学校における学校支援ボランティアの有用性を高める経営的要因に関する研究—「事例的分析」を中心に— 学校経営研究, 36, 62-74.
- 15) 瀬戸知也（2013）. 「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告（その1）：平成23年「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の現状と課題 静岡文化芸術大学研究紀要, 13, 105-108.

〈キーワード〉

学校支援ボランティア, 効果的活用, 教員満足度, 学生の資質, 大学と学校の連携

酒井 研作（現代文化学部子ども発達教育学科）

溝部ちづ子（現代文化学部言語文化学科）

石井 眞治（現代文化学部子ども発達教育学科）

斉藤 正信（教職指導センター）

財津 伸子（教職指導センター）

道法亜梨沙（教職指導センター）

谷川 宮次（現代文化学部マスコミュニケーション学科）

（2016. 10. 31 受理）